

二 東京外国語学校時代（明治・大正期）一八九九—一九二六年

1 「仏語学科」時代 一八九九—一九一九年

独立した東京外国語学校では、これまでの英・仏・独・露・西班牙・清・朝鮮の七科に伊語が加わり八語科となり、「正科」を「本科」に、「特別科」を「別科」と改称される。学年歴は九月十一日より翌年九月十日までが三学期に分けられる（現在と同じ四月始業、翌年三月終業の暦は一九〇四「明治三十七」年からである）。本科修業年限を三年とし、別科を三か年以内とする。別科はさらに同〇四年五月、専修科と改められた。

外国語の授業は三年間を通して、毎週二四時間、体操が毎週三時間と定められ、仏・独・露・伊・西・清・韓語学科の二年級以上の生徒は、志望により英語を兼修できるとし、また、本科生徒は、校長の認可を得て別科（専修科）を研修できると定められているが、その後の第二外国語に相当するものであろう。発足当時の教官は次のとおりである（『東京外国語学校一覽 從明治三十二年至三十三年』による）。

教授 吉田義静 講師 法学博士 神藤才一、庄司鉄造（陸軍大学教授）、鶴田久蔵
外国人教師 ポール・ジャクレー

第一回（明治三十三年七月）卒業生は次の三名である。

瀧村立太郎、平山猪象、宮崎幹太郎

一九一七（大正六）年末、突如校名改称の是非をめぐって、校内はわき立った。しかし各語科生徒・各同窓生は固く団結して、校名存続を勝ち得たのである。

2 「仏語部」時代 一九一九—一九二六年

大正八年、「語科」を「語部」に改め、各語を文科（文学・法律）、貿易科、拓殖科の三科に分け、本学の内容を時勢の要望に副わしめようという方針が決定された。

実はこれは本校のみに限らず、官・公・私の別なく、高等教育の拡張を目論む一大変革だった。「文明開化」はいみじくも「富国強兵」の国是を促進する原動力となり、日清・日露の戦い、第一次世界大戦の試練を経て、日本は世界の桧舞台に登場したのである。さまざまなイデオロギー、価値観の拮抗、資本主義の急速な発達とそれに伴う社会問題の頻発など、いわば「大正デモクラシー」模索の時期であった。大量の知識人が要望され、国家にとって高等教育機関の増設、昇格が緊急の課題であった。因みに一九二〇（大正九）年、高等商業学校は初の官立単科大学、東京商科大学へと昇格した。

誰の目にも明らかだが、本校の特殊性から見て、新しい授業編成では、専攻語学をマスターする一方、倍加する新たな科目を同じ三か年で修得することは至難のわざと判断された。三年制を四年制ないし五年制に延期すべしとする意見が圧倒的だったが、議論が沸騰し、長い歳月をかけて検討が重ねられた結果、四年制へと発足したのが一九二七（昭和二）年四月であった。「東京外国語学校創立二十五周年記念文集」（一九二二年）冒頭の「東京外国語学校沿革」には「世上動もすれば之を以て他校昇格運動と混同し本校の底意を疑ふものあるは甚だ遺憾」と述べられ、「只

管母校内容の充実を希ふのみ」と結ばれている。

『仏友会誌』一三号（一九三〇年）から、当時の雰囲気を彷彿とさせる文を二つ抜粋しよう。

「私共の入学した年は丁度母校の年限延長問題の火花をちらしてゐた時で、当時の諸専門学校の昇格運動と交錯して高等教育にとつて一つの苦しい転換期でありました。外国語学校を五ヶ年制にしようとする運動と専門学校を大学にしようとする運動とが…全く混同されがちでした」（大正十三年卒、佐藤良雄）

「明春〔昭和六年三月〕新制度最初の卒業生を出すとのこと、誠に感慨無量です。私共も在学中は随分あの制度問題で結束して文部省に迫つたもので、何度か徹夜して氣勢をあげたことを憶出します。或時などは焼芋の熱いのを嚙りながら、十時近く迄戦闘を続けたものです」（大正十一年卒、工藤爾）

教官 一八九九（明治三十二）年—一九二六（大正十五）年

（1） 本学出身者

教授 瀧村立太郎（明三十三年卒、明三十三—昭十五年在職）、鷺尾猛（明四十五年卒、大九—昭二十三年在職）、

増田俊雄（明四十二年卒、大十一—昭十六年在職）

助教授 若林耿介（明三十五年卒、明三十八年在職）

講師 中川豆介（明三十五年卒、明三十七—明四十年在職）、毛利由一（明四十年卒、大九年在職）、時田清（大三

年卒、大九—十三年在職）、山内義雄（大四年卒、大十一—十三年在職）、関根秀雄（大五年卒、大十一—昭九年

在職）、齊藤寛（大七年卒、大八年在職）

（2） 本学以外の出身者



ポール・ジャクレー

教授

吉田義静（明三十二―三十七年在職）、重野紹一郎（講師明三十九年在職、明四十一―大六年在職）、井上源次郎（講師明四十四―大七年在職、大八―十年在職）

講師

神藤才一（明三十二―三十七年在職）、織田信義（明三十四―四十二年在職）、庄司鉄造（明三十二年、三十三年在職）、鶴田久蔵（明三十二年在職）、市野良雄（明三十四―四十三年在職）、杉田義雄（明三十九―大八、大十二―昭和二年在職）、久米桂一

郎（大七―九年在職）、武田英一（大六―十年在職）、内藤濯（大七年在職）

教授陣のプロフィールについては、次章の「昭和期」に継続する教官が多いので、次章でまとめることにするが、ここでは『ガリシムの研究』（白水社、一九三〇年）、『新仏和中辞典』（田島清と共編、白水社、一九三七年）などをもって知られる井上源次郎、勤めのかたわら詩作に打ち込み、遺稿『フランス古典哀傷詩一訳と解説』（自費出版、一九九三年）を残した齊藤寛などがいたことを特記しておこう。

こうして一九二七（昭和二）年に始まる専門学校後半期には、瀧村、鷺尾、増田のトリオに永井順（大正六年卒）、工藤肅（大正十一年卒）、小林正（東大、昭和十年卒）の三教授が加わり、四年制教育を軌道に乗せ、良き伝統に磨きをかけるのだが、誠に教育における「師資相承」の実と云うほかない。

（3）お雇いフランス人教師（五名）、非常勤フランス人講師（八名）

そのうち、次の三名は特に著名である。

ポール・ジャクレーは在職一八九七—一九二〇年であるが、その間、第一次大戦に応召したため一九一五—一八年の四年間休職。教室でその醫咳に接した増田俊雄の随筆集『リラの花かげ』（増田先生遺稿刊行会、一九六四年）中の二篇「入浴談議」「ポール・ジャクレー先生」によって、彼の創意溢れる熱心な授業風景が偲ばれるし、一九〇五（明治三十八）年に別科を卒業した、かの社会思想家大杉栄の『自叙伝（六）—四』によっても、彼の面影に接することができる。一九〇六（明治三十九）年、勲五等瑞宝章。

教師モイーズ・シャルル・アグノエル（次章参照）。

講師ジョゼフ・コット（明治四十三—大正二年在職）は東大講師も兼ね、とくに一九一七（大正六）年におけるアテネ・フランセの創始者として知られる。

三年制における仏語科・仏語部（一九〇〇—一九二九年）卒業生

卒業生の総数は五三四名である。ここに限られた紙面ではあるが、人々の記憶にある先輩の名前をピックアップしてみよう。

まず政界・実業界であるが、石川県選出衆議院代議士で、衆議院議長、國務大臣を歴任した益谷秀次（明治四十二年卒）ほか、磐城セメント社長の斉藤次郎（大正十一年卒）、日本興業銀行頭取に就いた島田英一（大正十三年卒）、日本銀行発券局長、鎌山覺（大正十五年卒）が挙げられよう。文芸の分野では、福岡高等学校講師を経て、翻訳、作家活動に入り、小説『普賢』（版画社刊、一九三六年）で芥川賞を受賞、以後小説、批評を次々と発表し、芸術院会員に選出された石川淳（大正九年卒）やユーモア作家、玉川一郎（昭和三年卒）がいる。新聞関係では、読売新聞特

派員として戦前・戦中パリに留まり、日仏文化の紹介に尽くした松尾邦之助（大正十一年卒）、朝日新聞記者で、幅広くタレントとして活躍した渡辺紳一郎（大正十一年卒）、また時事通信パリ特派員を務めるかたわら、翻訳ほか執筆活動を続けた井上勇（大正十二年卒）があり、出版界では、戦後数々のベストセラーを世に送り出した光文社社長の神吉晴夫（大正十一年卒）などがある。

学界、教育界では、早稲田大学へ赴任のため、本学講師の期間は短かったとはいえ、そのフランス文学への造詣の深さをもつて、学生たちに多大な啓発と感銘を与えた山内義雄（大正四年卒）を忘れてはならない。ここに述べるまでもなく、山内は、その抜群の語学力と文才を駆使して、『モンテ・クリスト伯』『チボー家の人々』の長編の訳業をはじめ、詩の珠玉の名訳など、今日においても色褪せない業績を残している。教育界、とくにフランス語関係の教職については、その割合が他校を圧して多く、枚挙に暇がないほどである。仏和辞典・参考書などをもって、フランス語学習に多くを寄与した陸大教授、田島清（明治三十八年卒）を筆頭に、『仏蘭西広文典』（共著、白水社、初版、一九二七年）の著者、大阪外国語大学教授、目黒三郎（大正九年卒）、日仏文化交流史研究に大きな足跡を残した、共立女子大学教授、高橋邦太郎（大正十一年卒）、音声学の草分けで、日本大学教授、佐藤良雄（大正十三年卒）、慶応大学教授文学博士（アラビア語、アラブ地域文化）、前嶋信次（大正十三年卒）、ロマン・ロランの研究で知られる、聖徳女子短期大学教授、蛭原徳夫（昭和四年卒）、明治大学教授、経済フランス語の尾上貞五郎（昭和四年卒）、詩人としても知られている横浜国立大学教授、山崎栄治（昭和四年卒）が挙げられようが、以上はもちろん一部である。

また、満百歳の天壽を全うし、生涯の大半を母校のため、外語会常任理事、仏友会会長として、繁雑な名簿作成に打ち込んだばかりでなく、後輩の世話に余念のなかった後藤篤（大正九年卒）の善意と功績を特記して、欽仰の念を捧げたい。

一つの余滴

リヨン駐在領事として一四年間勤務した外務書記生、若月馥次郎（明治三十七年卒）の遺徳と日仏親善に寄与した功績を記念し、その没後、一九三〇（昭和五）年、リヨンを参事会は、同市モンブレジルの新しい街路を「若月通り」と命名することを、満場一致で可決した。国際親善のささやかな一ページではないだろうか（『仏友会誌』一九三〇年より）。